

3

# 「情報処理」大変革の夜明け前

## —石田編集長の誕生に向けて

国立障害者リハビリテーションセンター研究所

諏訪基



3月下旬に情報処理学会会誌編集委員の中川晋一先生から突然メールをいただきました。「我が情報処理が、石田編集長のおかげで内容や構成が一変し、bitなど有力誌なき最近となつては、学会員ばかりではなく、広く情報処理にかかわるすべての研究者にとって重要な情報源になりつつあります」とのことです。石田晴久先生のご功績を讃えて特集号を企画するので協力するようにとのことでした。

石田晴久先生に編集長をお願いした当時の「情報処理」は、どうやってbitのように「読まれる」あるいは会員にとって「魅力のある」学会誌に改善するかという議論が繰り返されていました。筆者は「将来ビジョン検討委員会」のメンバーの一員として学会誌担当理事の立場で議論に参加していました。そのときに考えたことは、「毎回後戻りをしてしまう改革を、これから先は繰り返さないで済む解決方法」を見つけて実行に移すべきではないかということでした。その結果、「恒久的な改革の機構を内在する編集体制」の切り札としての解決策として石田先生を「情報処理」の編集長としてお迎えすることになりました。10年が経った現在、周囲状況の変化とあいまって、「情報処理」の存在感がますます大きくなっていることは素晴らしいことで、改めて石田先生のご功績に敬意を表します。

### 「情報処理」の改革に向けて

学会誌は学会の「顔」的存在であり、最新の技術動向や学会活動に関する情報などを会員に提供する重要なサービス手段ですので、魅力的な「情報処理」を望む声は理事会の場だけではなく、会員からも聞こえていました。理事会は、会員数の減少に歯止めをかけて学会組織の基盤強化を図るという深刻な必要性から、新会員の獲得と退会防止への効果も期待していました。

1996年度、野口会長は「将来ビジョン検討委員会」を組織して、学会誌の全面的刷新の方針を打ち出しました。

学会誌としての魅力を増す方策を探して実行に移すことでありました。背景には、会員が3万人を割り込んだ危機感がありました。

新・旧「情報処理」の切り替え作業の段取りを表-1に書き出してみました。「将来ビジョン検討会」での検討に1年間を費やしましたが、改革案が提案され方針が決まった後は新装「情報処理」への完全移行(1998年4月)に向けて10カ月間の突貫工事に取り組みました。

後でも触れますが、改革を成功裏にかつスピーディに進めることができたのは大変スムーズに石田先生に編集長をお引き受けいただけたことに尽きると思います。

### 継続的な編集責任者をヘッドとする編集体制への移行

1997年2月の「将来ビジョン検討会」に会誌検討WGから提出された改革試案の骨子は次のようなものでした。

年 月	事 項
1996年 2月	「将来ビジョン検討委員会」 <sup>★1</sup> で学会誌の改革について検討開始
1997年 2月	将来ビジョン検討委員会報告書とりまとめ ・編集長制度の提案
6月	編集長候補者人選と準備作業開始を決定(理事会)
7月	石田晴久氏の就任内諾 移行準備WG作業開始
	1998年4月発行分(39巻4号)より移行を決定(理事会)
9月	新学会誌編集準備委員会の設置承認(理事会)
10月	第1回新学会誌編集準備委員会(以下月例開始)
12月	1998年4月号目次決定(新学会誌編集準備委員会)
1998年 1月	学会誌A4判に移行、デザイン一新(39巻1号)
4月	新装学会誌発行開始
5月	新編集委員会承認(理事会)

★1 検討会メンバーは、野口正一(委員長)、高橋延匡(副委員長)、磯崎澄、飯塚浩司、安西祐一郎、池田克夫、池田俊明、小泉寿男、杉本和敏、諏訪基、富田眞治、林弘、藤林信也、益田隆司、松田晃一、山本昌弘、米田英一

表-1 「情報処理」新旧切り替え作業の進行状況

学会誌改善努力の最近の足跡

	委員会等		目的	提案	成果
昭和 63 年 (1988 年)	S63 11.22	学会誌についての一考察	[昭和 57 年アンケート分析]	・第 2 会誌検討	
	未来委員会 尾関雅則委員長				
平成元年 (1989 年)	H1 3.24	学会誌のあり方について	[読者層見直しに基づく改善提案]	・編集企画/方法改善 ・改善 3 レベル提案	・WG 運営改善/ WG 重視 ・装丁改訂
	H1 11.9	学会誌の改善について考察(苗村メモ)	[問題点, 方策, 制約条件 →当面の対処方針の提案]	・サーベイ記事重視 ・編集権限の一元化	
	財務委員会 戸田巖委員長		[収支改善]	・広告増収 ・学会誌印刷経費の節減	・広告単価の値上げ ・学会誌印刷経費の節減
平成 2 年 (1990 年)	H2 5.16	学会誌編集長の設置について(学会誌編集担当理事)	[学会誌改善]	・学会誌編集長(理事とは別建) ・2 年 1 期最長 4 年	<総務理事預かり>
	H2 6.25	学会誌に対する意見について(事務局飯塚)	[日経西村氏, オーム社佐藤氏意見聴取]	・編集権限を持つ ・プロ集団への委託	
平成 3 年 (1991 年)	学会運営企画委員会 小林亨委員長		[専門化・多様化・学際化・国際化への対応, 会員増]	・学会誌特集号セミナー	学会誌特集号セミナー開催
平成 4 年 (1992 年)	部会制検討委員会 相磯秀夫委員長		[参加意識向上, 活性化]	・学会誌の改善 ・新雑誌の発行 ・研究会活動との連携	・モニター制度 ・アンケート ・分かりやすく ・実務家向記事 ・新雑誌検討委員会設置
平成 5 年 (1993 年)	学会活動活性化委員会(第 1 次) 相磯秀夫委員長		[学会の立場の認識, 研究開発活動中心, 学会の責任]	・実務家向け ・委員会新設 ・記事新設 ・委員会運営の効率化	・実務家向委員会設置 ・委員会運営の効率化 ・ページ減 ・会告の完全版下化
平成 6 年 (1994 年)	学会活動活性化委員会(第 2 次) 平栗俊男委員長				
平成 7 年 (1995 年)					
平成 8 年 (1996 年)	将来ビジョン検討委員会 野口正一委員長				
平成 9 年 (1997 年)					

表-2 1997 年 2 月の将来ビジョン検討委員会に提出された資料. それまでの 10 年間における学会誌改善に向けた検討と努力が繰り返し行われていたことを指摘している。「改善が恒常的に行われる体制」の必要性の根拠の 1 つとされた.

- 従来から学会誌の改善に関する検討作業が継続的に行われてきており, その論点は「魅力のある学会誌の実現」と「経費の節減」の 2 点に集約できること, また, 「経費の節減」は事務局の努力で顕著な効果が現れているものの, 「魅力ある学会誌の実現」は今もって急務であること.
- 「魅力のある学会誌」の議論では, 「大衆路線か, 学会としての格式か」という両立させることが難しそうな見解に決着をつけるよりは今後議論を続けることとして, まずは「学会誌としての一貫性」を持つことと, 「魅力のあるテーマと読みやすい文章」がポイントであること.
- 今回の提言が, 従来繰り返してきた“提言-改善”の波の 1 つに終わらせるのではなくて, あたかも再帰関数のような提言, すなわち, 「編集チームの中で繰り返しかつ継続的に“提言-改善”のアクションが起動する」というメカニズムを提言する必要があること.

- 改善が恒常的に行われる体制を確立するために「継続的な編集責任者をヘッドとする編集責任体制の導入」が考えられる最善の方策であること.

表-2 は 1997 年 2 月の将来ビジョン検討委員会に提出された資料の 1 つです. 学会誌改善に向けた検討と努力が, それまでの 10 年間にも繰り返し行われていたことを指摘しており, 「改善が恒常的に行われる体制」の必要性の根拠の 1 つとされました.

具体的なインプリメンテーションとして出版社への外注と編集長体制による内製が検討されました. 外注による編集方式では編集の責任体制が学会から離れることになり好ましくないとの判断から, 結局編集長方式が提案されました.

それまでの編集責任者は 1 年ごとに交代する会誌編集担当理事でしたので継続性や一貫性の確保の点からも無理がありました. また, 毎号の目次案の作成は 6 つの WG からの提案に基づいてボトムアップに構成して

いましたから、読者の要望にタイムリーに応えるような企画を実現させるには困難がありました。その点、編集長方式は、任期を1期2年とし2期は続投することを想定しましたので、じっくりと腰を落ち着けて編集ならびに改革に取り組んでもらえることが期待できました。

ちなみに、学会誌の制作経費に関しては、すでに事務局の努力によって、1990～1997年の7年間に30%もの経費の削減が実現していました。

## 編集長のリクルート

改革の要が編集長であることは間違いのないのですが、適任の引き受け手を探せるか大きな冒険が潜む提案でもありました。過去の学会誌見直し作業でも編集長の設置が建議されたことがありますが、具体化に至ったことはありませんでした。将来ビジョン検討委員会の学会誌WGが楽観主義者から構成されていたためか、少々無謀な提案ができたのかもしれませんが、そうは言っても学会誌担当理事経験者にあらかじめ協力を打診するなどの手は打ってあったようでした。

石田編集長の実現には1997年度に就任された戸田巖会長が大きな力を発揮されました。戸田会長は就任早々から石田晴久先生に白羽の矢を立てて、7月には初台のアスキー本社に戸田会長、担当理事の私、飯塚事務局長が石田先生をお訪ねして正式に編集長就任を要請し、内諾を得ることができました。あまり知られていない編集長決定の顛末だと思います。

石田先生は1997年10月に情報処理学会誌の初代会誌編集長に就任され、4年半にわたり、新しい学会誌の編集におけるリーダーシップを発揮されました。

## 新・旧の「情報処理」の切り替え

通常の学会誌編集委員会を開催しながら移行準備WGを発足させたのが7月でした。7月の理事会で、新装学会誌への切り替えによる最初の「情報処理」を39巻4号からとすることを決めて、それに向けて準備の段取りを逆算して作成しました。B5判からA4判に変更するにあたっては、合本の都合上1月号から判のサイズを統一する必要がありましたので、表紙のデザインの公募をそのタイミングに合わせて行う、などということも生じました。9月の理事会で新学会誌編集準備委員会の設置が認められ、12月には4月号の目次の決定が行われました。1998年5月の理事会で新編集委員会が承認されるまでの間は、2つの編集委員会がそれぞれ編集業務を遂行していました。図-1にはB5判で発行された最後の「情報処理」(第38巻12号1997年)と、石田新



図-1 B5判で発行された最後の「情報処理」(第38巻12号1997年) [左]と、石田新編集長による新装第39巻4号。旧体制の編集による発行は第39巻3号まで続いたが、合本の便を考慮してA4判への移行を暦年に合わせることにされた。

編集長による新装第39巻4号のそれぞれ表紙を紹介しておきます。

## 改革の評価?

あたかも再帰関数を定義するように、定常的な改革機能を有する編集体制への改革を提言した「将来ビジョン検討委員会」の目論見は、石田編集長とその下で大いに知恵を発揮された編集委員会のメンバ、学会事務局担当者の全員のチームワークで見事に開花しました。「大変革の夜明け前」の演出に参加した野口会長、戸田会長はじめ、「将来ビジョン検討委員会」のメンバ始め「情報処理」の改革にかかわった多くの関係者の協力があったこそ提言を実行に移すことができました。

提言を作成する際に棚上げしておいた「大衆路線か、学会としての格式か」の路線論争もいつの間にか解決したように思いますがいかがでしょうか。

(平成21年6月11日受付)

諏訪 基 (正会員) suwa-motoi@rehab.go.jp

1968年東京大学工学部電子工学科卒業、同年電気試験所(後の電子技術総合研究所、現(独)産業技術総合研究所)入所、企画室長、情報科学部長、電子技術総合研究所次長、大阪工業技術研究所長、(独)産業技術総合研究所理事・関西センター長を経て、2003年より国立障害者リハビリテーションセンター研究所福祉機器開発部長、2005年より同研究所長。コンピュータビジョン、ロボティクス、エキスパートシステム、ヒューマンインタフェースなどの研究開発に従事。現在の課題は障害者支援技術(アシスティブ・テクノロジー)および障害者のための情報バリアフリー技術。本会、人工知能学会等の理事等を歴任。現在日本生活支援工学会副会長、日本工学アカデミー、電子情報通信学会、人工知能学会、日本ロボット学会、日本ソフトウェア科学会、日本リハビリテーション工学協会各会員。